

平成27年度

中学入試（1回）

国語試験

注意事項

試験開始のチャイムが鳴るまで勝手にあけてはいけません。

1. チャイムが鳴ったら、ページ数(15ページあります)を確認しなさい。
2. どの問題からやってもかまいません。
3. 解答はすべて別紙の解答らん書きなさい。

号 室		番 号		氏 名	
--------	--	--------	--	--------	--

一 次の①～⑤の□に当てはまる言葉を語群から選び、漢字で答えなさい。

- ① 困□□に立ち向かう。
② 進化の□□程を調べる。
③ 展□□会を見に行く。
④ 新記録を□□立した。
⑤ 音楽に□□心がある。

《語群》

ジュ ナン カン ラン カ

二 次の①～⑤の□に当てはまる漢字一字を自分で考えて答えなさい。

- ① 雨降って地□□まる。
② 国に税金を□□める。
③ 夕日に□□まる美しい景色。
④ □□糸と横糸を組み合わせる。
⑤ 急いでいるので、要点を手□□かに話す。

三 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

① アンパンマンはとてもユニークなヒーローである。なんといってもヒーローが自分の顔を食べさせるのだから。

アンパンマンが絵本に登場した一九七〇年代、日本のテレビやアニメはすでに数々のスーパーヒーローを生み出していた。一九五〇年代後半には『月光仮面』や『七色仮面』といった、仮面をつけたヒーローが活躍するテレビドラマが人気を博している。日本でも一九五六年からテレビ放映されていたアメリカ製『スーパーマン』の日本版だ。一九六〇年代になると、不朽の名作アニメ『鉄腕アトム』が、同じ時期にテレビで放映された『鉄人28号』とともに子どもたちを魅了する。

(中略)

アンパンマンが絵本としてひそかに出発したとき、日本のスーパーヒーローたちはだれもが強大な敵と華々しく戦い、高度成長で潤う日本を守るため、悪者たちを打ち倒していた。それに比べてアンパンマンはどうだろうか。ひもじい思いをしている人のもとに下り立ち、みずからの顔を食べさせていたのだ。しかも、贅沢な食べ物とはいいたいあんパンを。

② 同時代のヒーローたちと比べてみると、アンパンマンのユニークさがいちだんと際立っていることがよくわかる。

(中略)

アンパンマンの独自性は、当初から作者によって十二分に意識されていた。一九七三年に絵本として『あんぱまん』を出すものの「大悪評で、出版社からは「アンパンマンの絵本はこれ一冊で、もう描かないでください」と言われ」た作者やなせは(『人生なんて夢だけだ』)、その後もアンパンマンに愛着をもちつづけ、自身の編集する『詩とメルヘン』で「怪傑アンパンマン」を一九七五年一月から翌年の五月まで一年半にわたって連載している。これは「熱血メルヘン」と副題があるように、一種の大人の童話である。さらに、一九七六年九月からは、やはり自身が編集している幼児向けの雑誌『いちごえほん』でも、「あんぱまん」を、同誌が終刊となる一九八二年七月まで連載している。

〈注〉1 ひもじい——空腹で我慢できない状態。 2 作者やなせ——「アンパンマン」の作者やなせたかしのこと。

こちらは幼児向けということもあって漫画形式だ。

「怪傑アンパンマン」の連載終了の翌月号に書いた「アンパンマン雑誌」で、やなせはアンパンマン執筆の動機について、「あたりじゅうメチャメチャに踏み荒らしても、被害者に謝りにいったりしない」③「スーパーヒーローたちへの違和感を表明し、「本当の正義とはいったい何だろう」と問いかけ、「我々が本当に助けてもらいたいののは、たとえば、失恋して死にそうな時、おなががすいてたおれそんな時、あるいは旅先でお金がなくなった時、その他いろいろあるわけで、そういう細かいところに気がつく優しいスーパーマンがいてほしい」「詩とメルヘン」一九七六年六月号」と述べている。

このあと、やなせは子供のころ遠出をして財布を落とし、ひもじく寂しい思いで遠い道のりを歩いて帰ろうと思っていたと、友だちとその母に出会い、買ってもらったあんパンが体と心にしみわたったという体験を語っている。

世間の悪と戦う大文字のヒーローではない、弱い人を人知れず救う小文字のヒーロー。それがアンパンマンなのだ。

(中略)

ここで注目すべき点は、飢えている人にみずから顔を差し出し、その顔をかじつてもらうということだ。最初にアンパンマンをかじるのは、砂漠でお腹をすかせた男の旅人で、旅人はアンパンマンが差し出した顔をかじり、元気を取り戻す。顔のほぼ半分がなくなったアンパンマンは、次に森で迷子になり、お腹を空かせて泣いている子どもを見つけ、背中に乗せて家に送る途中、その子どもに顔をかじらせて、ついに顔全体がなくなってしまう。その後、雨にあい弱ったアンパンマンは、パン工場の煙突に墜落し、のちにジャムおじさんとなるパン作りのおじさんに顔を作り直してもらう。

絵本には、しっかりとかがじられたアンパンマンの顔が描かれている。顔を差し出してかじってもらっているため、かがじられた部分は、菌形のあとがつき、生々しく不規則でぎざぎざだ。かじる行為をうながされた相手も、最初はためらいを見せる。砂漠で飢えた旅人は「そんなおそろしいことはできません」と断るし、背中に乗った子どもも「かおがなくてもだいじょうぶなの」と心配する。

作者のやなせは「この最初の本で、ぼくが描きたかったのは、顔を喰べさせて、顔がなくなってしまったアンパンマンが空を飛ぶところだ」「時代の証言者」と述べている。自分を犠牲にして相手を助ける姿を描きたかったのである。自分を相手に食べてもらう、これほどわかりやすい自己犠牲もない。しかし、助けられる人々は弱い立場の善良な人たちだから、このような明らかな自己犠牲にためらいを感じる。作者はそうした反応もしっかり書き込んでいる。

こうして顔をなくしたアンパンマンはエネルギーを失って弱ってくる。やなせは先ほど引用した文章に続けて、「顔がなくなってしまったアンパンマンは、エネルギーを失って失速する。この部分が描きたかったのだ」とも述べている。弱いアンパンマンは、アンパンマンの行為がまさに自己犠牲であったことを示している。そこに込められているのは、「傷つくことなしに正義は行えない」(同書)という、やなせの重いメッセージである。

(福田育弘「いただきまーす!アンパンマン——日本的な飲食の感性を体現するヒーロー」より)

作問の関係上、一部省略があります。

問一——線部①「アンパンマンはとてもユニークなヒーローである」とありますが、どのようなところが「ユニーク」のですか。それを20字以内で説明しなさい。

問二——線部②「同時代のヒーロー」は、何のためにどのようなことをする「ヒーロー」だったのですか。それを20字以上30字以内で説明しなさい。

四 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

一九九五年、兵庫県で発生した阪神・淡路大震災により両親を失った阿藤家の三兄妹は、医院を営む佐元良是朗（通称「ゼロ先生」）の養子として育てられました。被災時の怪我により右足が不自由な長女の「丹華」は、小学校六年生になり、「ゼロ先生」が週末に行っている被災者訪問に加わるようになりました。以下はそれに続く部分です。

最近の丹華は、ちよつとおかしい。

なんだか、上の空で、学校の授業も、宿題も、家事も、何をしていても、ぼうつとしていて、ついついミスをしてしまう。

学校では、窓際の席で頬杖をついて、いつも空を見上げている。もつとも、空を見上げるのは、いまに始まったことではないのだが。

天国のお父ちゃんとお母ちゃんが、いつとも見守ってくれてるんやで。

① 幼い頃、ゼロ先生に、そう教わった。

たとえ姿は見えんでも、声は聞こえんでも、お父ちゃんとお母ちゃんは、空の上にいる。

ニケや、^{注1} イッキや、^{注2} サンクが、どこにおつても、いつとも空の上から見てくれるんやで。

せやから、いたずらでけへんぞ。勉強、宿題、サボられへんぞ。お父ちゃんとお母ちゃんが、ずうつと見てんねんからな。

いやなことがあつても、何かに負けそうになつても、大丈夫や。お父ちゃんとお母ちゃんが、ちゃあんと味方してくれるんや。

ええか、ニケ。お父ちゃんとお母ちゃんに見られとつても、恥ずかしいように生きていかなあかんで。

ゼロ先生に教えてもらったことに、いつも丹華は励まされた。

天国のお父ちゃんとお母ちゃんが悲しんだり、怒つたりするようなことは、絶対にしない。逆に、ふたりが喜ぶようなことをしよう。

そう思いながら、丹華は成長した。

《注》 1 逸騎——丹華の兄。中学校二年生。 2 燦空——丹華の弟。小学校二年生。

けれども、このところ、丹華は、ほんものの「上の空」になってしまった。

「佐元良さん……佐元良さん。この問題に、答えられますか」

授業中、先生に名前を呼ばれて、「は……はいっ」と立ち上がり、あたりをきよろきよろ眺めて、

「え……なんやつたつけ？ ええと、ええと……わかりません」

そう答えて、真つ赤になる。とたんに、教室のあちこちから、くすくす笑い声がわき起こる。

——ニケちゃん、なんか、おかしい？

いつつも、ぼうつとしとおし。空ばかり、見上げとおし。

でも、あの子、まえから、ちよつとぼうつとしとお子やつたやん？

そやな。ぼうつとニケちゃんやつたけど、最近、超・ぼうつとニケちゃんとちゃう？

くすくす、くすくす。意地の悪い女子たちのひそひそ声が聞こえてくる。丹華はますます真つ赤になるが、ほんとうにぼうつとしているのだから、仕方がない。

家に帰つても、「ぼうつとニケ」は、ますます「ぼうつとぼんやりニケ」になるばかりだ。

買い物メモと違うものを買ってきてしまったり、料理を作っているときも、砂糖と塩を間違えて入れてしまったり。

「なんや、このとんかつ、めっちゃ甘いねんけど……」

丹華の担当で作ったとんかつをひと口かじったゼロ先生が、耐え切れない、という感じで言ったことがあった。逸騎と、丹華と、燦空、それぞれにかじつてみて、「ぼんまや……」と、それ以上、言葉が続かなかった。

ぼうつとぼんやりニケに、どうしてなつてしまったのか。

その理由は、はつきりしていた。丹華自身、ちゃんとわかつていた。

好きになってしまったのだ。——生まれて初めて、男の子のことを。

彼の名前は、片山陽太。

いま、丹華と同じ、小学校六年生。ただし、同じ長田の子ではなく、神戸市内の岡本というところにある小学校に通っている。

初めて会ったのは、半年まえ。小学校五年生のときだった。復興住宅に隣接するプレハブの「コミュニティルーム」の入り口付近で、ゼロ先生は、ボランティアに参加したいと申し込んだ片山のおじさんと陽太に「ぜひとも、よろしゅう頼みます」と、あいさつをした。

かたときも手放さないという、サッカーボールを片手に、最初陽太は、緊張気味に、ちよつとぶすつとした顔だった。丹華のほうも、初対面の男子にどう接したらいいかわからなくて、目を合わせられず、下を向いていた。

片山のおじさんとゼロ先生とは、会つてすぐに、ボランティア訪問について活発に会話を始めた。

陽太は、足もとのボールを、足先で、ちよいちよいと転がしていたが、ふと、顔を上げて、丹華のほうを見た。

② 丹華は、ボールに夢中になっている陽太のうつむいた顔をこっそり見ながら、(男子つて、みんな、ボール遊びが好きやねんなあ)と思つていたところだった。

目が合った瞬間、丹華の胸が、ことん、と音を立てた。小さな箱の中でビー玉が転がったような、ささやかな音。けれど、確かに、体のすみずみまで響き渡る音。

陽太は、気まずく思ったのか、ふいと顔を逸らして、わざとボールに熱中してみせるようだった。ひよいひよいと足もとで器用にボールを操っている。

おれ、サッカーがめっちゃ好きやねん。見てくれや。

不思議なことに、丹華には、陽太がそう言っているのが聞こえてくる気がした。だから、じつと陽太の足もとをみつめていた。みつめるうちに、ぽかんと口が開いてしまった。

〈注〉3 長田——神戸市の地区名。

「おお、陽太君、めっちゃうまいな。蹴りのプロになれるんとかうか」

丹華の横に立っていたゼロ先生が、陽太がさかんにボールを操るのをみつけて、そう言った。

「蹴りとかうわ。サッカーやで」

陽太は、そう言つて、何気なく、ぼん、とボールを軽く丹華のほうへ蹴った。それは、ちょうど、丹華の障がいがあるほうの足へ転がってきた。

あつ。

丹華は、とつさに足を引っこめようとして、バランスを崩し、その場に尻もちをついてしまった。

ゼロ先生が「おつ」とひと声叫んで、丹華の上半身を両手で支えた。

「わつ、大丈夫か、ニケちゃん!」

片山のおじさんが、びっくりして、あわてて両手を差し出した。ふたりのおじさんに支えられて、丹華は、歯を食いしばり、口をぎゅつと結んで、どうにか立ち上がった。

陽太は、よほどびっくりしたのか、声も出せずに体を硬直させて、丹華の様子をみつめている。おじさんが、その頭を、平手でぺちんと叩いた。

「お前、何やつとるんや! ニケちゃんがけがでもしたらどないすんねん!」

陽太の顔から、見る見る血の気が引いていく。丹華は、どうしたらいいかわからず、ただ黙ってじんじんする足を押さえていた。

「大丈夫、大丈夫。この子、案外強いねん。ちよつとびっくりしただけやろ。ほら、ニケ、見せてみ」

ゼロ先生は、丹華の背中を支えて、コミュニティルームの中へと連れていった。背後で、「女の子にひどいことするんやったら、もう連れてけえへんぞ!」と、おじさんが陽太をしかる声が聞こえる。丹華は、思わず振り向いた。

父にしかられながら、真剣な、とても心配そうなまなざしを、陽太は丹華に向けていた。丹華の胸の中で、また、何かがことんと音を立てた。

ゼロ先生は、丹華をパイプ椅子に座らせると、「ソックス、めくつてくれるか？」と言った。手術のあとを隠すために、丹華は、いつもタイツやジーンズをはき、夏でもハイソックスをはいている。その日は、膝まで隠れる紺色のハイソックスをはいていた。

丹華はうなずいて、ソックスをめくった。桃色の手術あとが現れた。二十センチ近くあり、くつきりと浮かび上がっている。ゼロ先生は、右手で手術あとをそうつとなでてから、かかを持って、上下にゆっくり上げ下げした。

「どうや、痛いかな？」

丹華は、首を横に振った。ゼロ先生は「そうか。よし」とつぶやくと、手術あとに手をかざして、

「大丈夫、大丈夫。平気や、平気や。ニケの弱虫毛虫、どっか行つてまえ！」

ひゅつと手のひらで空を切った。

丹華は、思わず「なんやの、それえ」と、笑い出してしまった。

「え、覚えてへんのか？ お前がちつさい頃、足が痛い痛い言うて泣きよったとき、こないしたったやろ」

そうだった。手術の直後は、余震の怖さと、さびしさと、両親がいらない悲しさと、いろんな気持ちがごちゃまぜになって、泣きたかった。でも、泣かない、弱音を吐かないと、おっちゃんと約束したから……足が痛いと言って、ごまかして、泣いたのだ。

そんなとき、ゼロ先生は、いつも「大丈夫、大丈夫」と歌うように言つて、「ニケの弱虫毛虫、どっか行つてまえ！」と、ひゅつと手のひらで空を切つて、丹華をなぐさめてくれたのだった。

「そやつたっけ？」丹華が、照れ隠しでしらばつくれると、

「なんやねん。びーびー泣いとつたくせに。都合の悪いことは、忘れてまうんやなあ」

ゼロ先生は笑つて、丹華の頭をくしゃくしゃとなでた。丹華も、えへへ、とつられて笑った。

ソックスをもと通りにして、先生に支えられながら立ち上がった。顔を上げると、正面の出入り口に佇む陽太が見えた。

「……入つてもいいですか」

遠慮がちに、けれどいいねいな物言いで、陽太が尋ねた。ゼロ先生は、振り向いて、にこつと笑いかけた。

「ああ、ええとも。入んなさい」

陽太は、まっすぐに丹華のところへやつてくると、被つていたヴィッセル神戸のエンブレム付きキャップを取つて、べこりと頭を下げた。

「……ごめん」

突然あやまられて、丹華はびっくりしてしまった。なんと答えたらいいのか、わからない。言葉を詰まらせて陽太をみつめていると、陽太のほうも、目を逸らさず、真剣な瞳で丹華をみつめ返した。

「おれ、なんか無茶してもうた。ほんま、ごめん。大丈夫かな？」

丹華の胸の中で、今度は、ことごとくと連続して何かが動いた。小さなビー玉が、何個も何個も、あちこち転がってぶつかって、痛いような、こそばゆいような、ヘンな感じ。

「あ……うん。ぜんぜん、大丈夫やし。気にせんとつて」

ぼそぼそと、小さな声でそう答えた。言いながら、顔がかあつと熱くなって、真っ赤になるのがわかる。陽太は、まっすぐに丹華をみつめるのをやめない。丹華のほうが、なんだか耐えられないような気持ちになって、赤くなった顔を逸らした。

ふたりを見守っていたゼロ先生は、にこつと笑つて、

「君、陽太、言うたな？」

陽太は、丹華をみつめたままで、こくんとうなずいた。先生は、ますます大きな笑顔になって、「うん。男やな」と言つた。

〈注〉5 ヴィッセル神戸——神戸市を拠点とするプロサッカークラブ。

「逃げも隠れもせえへん、言い訳もせえへん。面と向かって、きちんとあやまる。男やな。かつこええぞ、陽太」
そして、さつき丹華にしたように、陽太の頭を、くしゃくしゃとなでた。

陽太は、ゼロ先生を見上げると、ちよつと照れくさそうな、まぶしそうな表情になった。

「お父さんと一緒に、陽太も、ここでボランテア活動するんやろ？」

「はい」と陽太は、元気いっぱい返事をした。

「そうか。わしらも、このお年寄りを訪問するんが楽しみやねん。これから、よろしく頼むわ。……こいつのこともな」
そう言つて、ゼロ先生は、ぼんと丹華の肩を叩いた。丹華は、また、真っ赤になった。

「こら、ニケ。何もじもししとるんや。新しい友だちに、ちゃんとあいさつせなあかんやろ」

湯気が出るんじゃないかと思うくらい、顔を上気させて、丹華はあわててひょこんと頭を下げた。

「よ……よろしく」

陽太は、やっぱり、じいつと丹華をみつめたままだ。③ 丹華も、今度は目を逸らさずに、不器用な笑顔を作つてみせた。

「うん、よろしく」

陽太は、明るい声で答えた。丹華をみつめる目が、やさしく微笑んだ。

その瞬間、胸の中の小さな箱に、いっばいに詰まっていたきらめくビー玉が、いつせいに、きらきら、からから、ころころと、心地よいメロディを奏でながら転がり出すのを、丹華ははつきりと感じた。

そう。あのとき。あの笑顔を見た瞬間から、ずっと。

④ 丹華の胸の中では、色とりどりに輝くビー玉が、きらきら、からから、ころころと、転がったり、ぶつかったり、くるくる回ったり。にぎやかなメロディを奏で続けている。

(原田マハ『翔ぶ少女』より。)

問一——線部①〈幼い頃、ゼロ先生に、そう教わった〉とありますが、〈丹華〉はどのようなことを教わったのですか。20字以上30字以内で説明しなさい。

問二——線部②〈丹華は、ボールに夢中になっている陽太のうつむいた顔をこっそり見ながら、(男子って、みんな、ボール遊びが好きやねんなあ)と思つていたところだった〉とありますが、なぜ〈丹華〉は〈こっそり〉としか〈陽太〉のことを見られなかったのですか。その理由を20字以上30字以内で説明しなさい。

問三——線部③〈丹華も、今度は目を逸らさずに、不器用な笑顔を作つてみせた〉とありますが、ここから〈陽太〉へのどのような気持ちを読み取れますか。〈不器用〉が「ぎこちない様子」という意味であることをふまえて、35字以上45字以内で説明しなさい。

平成二十七年
度
中
学
入
試
回

受験番号



四

5

5

問四

問

問四

[illegible]

20

[illegible][illegible]

0

20

[illegible][illegible]

受験番号

氏 名

受験番号は解答用紙の右のらんにも記入しなさい。